

日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 38 2010 (平成22年度) No. 2 平成23年3月31日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局
〒187-0021 東京都小平市上水南町3-2-1 文化女子大学小平キャンパス栗山研究室内 (4月1日より文化学園大学に校名変更します)
TEL：042-327-8873 FAX：042-327-8874 E-mail：kokusairikai@bunka.ac.jp Website：http://www.kokusai.com

目次

巻頭の言葉 学会長挨拶	1	中国国際理解教育セミナー報告	8
第21回大会実行委員長挨拶	2	特定課題研究プロジェクト報告	9
第21回研究大会のご案内	3	全国各地の研究会からの報告	11
第21回研究大会シンポジウム	4	『現代国際理解教育事典 (仮称)』編纂について	13
第21回研究大会特定課題研究	4	理事会 (各委員会等) 報告	14
第21回研究大会自由研究の発表者と題目	5	お知らせ (これからの行事・イベント案内)	15
韓国国際理解教育学会報告	7	事務局通信	16

巻頭の言葉

セネガルを訪れて

学会長 大津 和子

1月に、アフリカ大陸の最西端に位置するセネガルに出かけてきました。「現職教員海外研修」(JICA主催)で、道内11名の小中高校の先生方と一緒に、ファシリテーターとして参加したものです。私たちはセネガルの小中高校を訪問して授業を参観し、子どもたちと交流して仲良くなった後、インタビューを行いました。こうした現地での経験をもとに、セネガルの子どもたちを主人公とした教材を作成し、日本の子どもたちの理解を深めることを目的としています。

ある村を訪問した時のことです。教室が3つだけの小さな小学校の前の広場に、子どもたちだけではなく多くの村人たちが集まり、大きな樹陰には村長はじめPTA会長など村の重鎮が勢揃いしていました。歓迎の挨拶の後、小学生による伝統的なセネガル相撲がはじまりました。砂の地面に足で丸く線を引くと、そこが土俵です。短パンの上から禪もどきを巻きつけた男の子2人が登場して、ダンス風の四股を踏んでから取っ組み合い、まさに真剣勝負です。周りを取り囲んだ子どもたちだけではなく、大人たちも鳴り物入りで大歓声の応援。ルールは日本の相撲と少し違い、地面に倒されたら負けになります。勝った子どもは、仲間に胴上げされながら意気揚々と退場するのです。

返礼として、日本メンバーはヨサコイソーランを踊りましたが、その後は、村人たちによるダンスが次々と披露されました。まずは村のお母さんたち(赤ん坊をおぶったお母さんも!)が、太鼓代わりの盥(たらい)の底や水運び用のポリタンクを木の枝で叩きながらのリズムに合わせて、足の動きの激しいダンス。そのうち、昔セネガル相撲の選手だったという老人も踊りでて、ヤンヤの喝采を浴びました。

こうして大人たちが熱狂的に踊る姿を、村中の子どもたちが手拍子を取りながら、憧憬の眼差しで眺めていました。こ

のような歓迎の行事だけではなく、村の祭りや会合など、人が集まると誰かが太鼓(または代用品)を叩き、誰ともなしに踊りだすのです。ですから、子どもたちは小さいときからダンスが大好きで、ダンスの上手な子どもは一目おかれます。

EFA(すべての子どもに教育を)の取り組みが世界的に推進されているなか、セネガルでもここ10年来、基礎教育の就学率は急速に高まっていますが、小学校84%、中学校24%(ユニセフ『子供白書2010』)と、まだ十分とは言えません。が、子どもたちは祭りや歓迎会といった「ハレ」の場では、地域の大人たちの振る舞いを見て学ぶとともに、日常生活においても水運びや弟妹の世話など家事を手助けすることにより、いわば「生産的」な役割を担うことにより、周囲から認められています。

他方、日本社会においては、子どもたちは幼いときからモノをふんだんに与えられ、もっぱら「消費者」として位置づけられ、モノへのさらなる欲求を絶えずかき立てられています。就学率100%であるはずの学校から「逃走」する子どもたちもいます。セネガルの子どもたちを垣間みて、「教育」のありかたについて、あらためて考えさせられています。



踊る村の女性たち
(北海道新聞鹿内朗代記者撮影)

3月11日の東北関東大震災で亡くなられた方々のご冥福を謹んでお祈りするとともに、被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。

第21回大会実行委員長挨拶

“おこしやす”の心で皆様をお迎えいたします

京都橋大学 井ノ口貴史

「おこしやす」と「おいでやす」を京都人は使い分けると言われます。京都では、「おこしやす」は予め予約や心待ちにしていたお客様がいらっしゃった時に使い、「おいでやす」は不意の客や一見の客に使います。馴染みになれば、「おこしやす、よう、来ておくれやしたな。」と迎えられる。逆に「おいでやす」と言われたら長居はせずに引き上げるのがたしなみなのです。おこしやすの心で皆様をお迎えいたします。

京都橋学園のルーツは、1902年創立の京都女子手芸学校にあります。学校は京都市内中立売、京都御所の西側にありました。「左近の桜、右近の橋」が校名の由来です。大学は1967年山科の地に女子大として作られ、2005年より共学化、文系・教育系・社会系・医療系という多様な学部と学科を抱える総合大学となっています。大学の横を走る名神高速道路は、付けかえ前の旧東海道本線の鉄道跡地を使っています。高台から西に延びる高速道路と京都東山に沈む夕日が絶景ポイントだと言われています。

日本国際理解教育学会は、昨年20周年記念大会を終え、21年目のスタートを切りました。1991年の設立総会で配布された設立の趣旨には次のように書かれています。

「21世紀を目前に控え、東西対立の冷戦構造が緩んで世界は新しい秩序をもとめて模索をはじめた。物、金、情報そして人間が国境を越えて活発に交流し合い、各国、国民の相互依存関係がますます強まってきた。

反面、民族、伝統、文化、言語等の違いによる競争、対立、誤解、摩擦も日常化し、国民相互の理解交流の大切さを示している。さらに環境問題など地球規模の新しい課題が我々の視野を全人類と来たるべき世紀に向けさせている。

人々の心に平和の砦を築くという精神の下に、ユネスコが永年唱えてきた平和と異文化理解を軸とする国際教育の必要性が今日ほど高まったときはない。国際教育は知識、技術、思考力、価値観、態度形成にわたる教育実践である。(以下略)

1991年1月26日に設立総会が開かれていますから、ちょうど湾岸戦争が始まって10日ほどという時期です。今から思えば、冷戦構造が崩壊し、世界に平和が訪れるとかもしれないという期待は、湾岸危機・湾岸戦争で打ち砕かれ、その後の民族対立、民族紛争、環境問題などが国際社会の大きな問題としてクローズアップされていく起点となる年でした。このような時点で、「ユネスコが永年唱えてきた

平和と異文化理解を軸とする国際教育の必要性が今日ほど高まったときはない」とグローバルな課題を捉え、学校現場でその課題に応える教育実践を呼びかけた意義は大きいと考えます。

それから10年、「9.11」を機に、21世紀を迎えた世界は新たな段階に突入します。新自由主義が格差と貧困を生み出し、アメリカ、EU、日本の経済危機は深刻化し回復の見通しが立っていません。世界の20%の人々が1日1ドル以下の生活を強いられ、児童労働や子ども兵問題など、途上国の子どもたちが置かれている現実を放置できません。また、地球環境問題は待ったなしの段階に入っています。

このような世界を前に、私たちの課題を、第20回大会での記念講演で佐藤学先生は、国際理解教育を再定義してグローバル教育へ展開すべきだとして、その問題領域を次の4つだと提起しました。①市民性の教育（地球市民、日本社会の市民、地域共同体の市民の三次元の市民性）、②他文化教育、③ESD教育、④平和教育がそれです。そして、「世界の中の私」を探求し「私の中の世界」を探求する教育を目指すことを提起しています。

今回、第21回研究大会では、公開シンポジウムとして、「9.11以降の平和教育の成果と課題」、特定課題研究として、「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」を設定し、参加者の皆様と今後の国際理解教育の課題を考えていきたいと考えています。また、地球的課題に取り組んでいる市民の皆さん、学校現場で日々格闘している教育実践者、教育研究に取り組んでいる研究者が、活発な議論を通じて、「実践と理論をつなぐ」実りある研究大会になるよう、準備を続けています。



キャンパスライフの中心施設リハティーホール

日本国際理解教育学会第21回研究大会（京都大会）のご案内

日本国際理解教育学会第21回研究大会実行委員会

日本国際理解教育学会第21回研究大会（京都大会）の概要について、ご案内致します。詳細については、過日お送り致しました大会要綱「日本国際理解教育学会第21回研究大会（京都橋大学）のご案内」（事務局HP 上にも掲載：<http://www.kokusairikai.com/>）をご覧ください。

1. 研究大会日程：2011年6月18日（土）・19日（日）

大会1日目 6月18日(土)	大会2日目 6月19日(日)
9:00 受付開始	9:00 受付開始
9:30 自由研究発表	9:30 自由研究発表
12:00 昼食	12:00 昼食
13:00 総会	13:00 特定課題研究
14:00 シンポジウム	16:00 大会終了
17:30 懇親会	

2. 会場：京都橋大学（〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34）

3. 京都橋大学への交通アクセス

■地下鉄東西線、柳辻（なぎつじ）駅より東へ徒歩15分、タクシーですと5分（約640円）。柳辻駅へは京都市内中心部から約20分、JR山科駅から東西線乗り換えて約4分です。

■京都駅八条口から、京阪バス京都橋大学行きで約30分（300円、乗り場はホテル京阪横）。但し座席指定制です。満席になると乗車できませんので、ご注意願います。

■JR山科駅・京阪山科駅から、京阪バス京都橋大学行きで約30分（210円）但し日曜は運休。あるいは、大宅行き京阪バスに乗り（約20分）、そこから徒歩7分。日曜も運行。

4. 大会参加費・懇親会費

①大会参加費（事前振込み）：一般会員3000円、学生会員2000円。（当日）：一般会員4000円、学生会員2000円、非会員5000円。

②懇親会費：一般会員及び非会員5000円、

③昼食：大学生協をご利用下さい。大学周辺には、コンビニ、飲食店などありません。

5. 公開シンポジウム

テーマ：「9.11後の平和教育の成果と課題—グローバル化の下で、戦争をどう伝え、どう教え、どう学ぶか」

2011年は「9.11」から10年目に当たります。この10年間、戦争や紛争の現場から、攻撃にさらされる当事者やフリーランスの記者がリアルタイムに情報を発信し、世界中の人々が生の情報を瞬時に手に入れることができるようになりました。小・中・高校の現場では、世界で引き起こされる戦争をリアルタイムで取り上げられた教育実践が行われてきました。過去、第14回大会（京都ノートルダム女子大学）のミニシンポジウムで、「9.11以降の国際理解教育を考える」というテーマで取り上げられていますが、学校現場ではどのような実践が積み上げられてきて、どのような成果や課題が見えてきているのかを検討したいと考えております。

6. 特定課題研究

テーマ：「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」

日本国際理解教育学会では、「持続可能な社会」とは何かということ、そしてそうした社会を形成する「教育」とはどのようなものかということを明らかにするために、持続可能な未来を創る教育（ESD等）のあり方について2年間、討議を重ねてきました。第21回大会ではその成果を皆様と分かち合い、ESD等をさらに推進していく契機とします。持続可能な未来を創る上で鍵となる学び・カリキュラム・学校運営・地域課題とはどのようなものかについて、国内外の実践とその背景にある理論を示し、皆さんと一緒に吟味していければと考えております。

7. 参加費・懇親会費振込先

①口座記号番号 00960-0-300976

②加入者名 第21回研究大会事務局

8. その他

■自由研究発表抄録原稿提出期日：2011年4月15日（金）必着【郵送のみ】

■大会参加申込期日：2011年4月28日（木）必着【郵送またはE-mail 添付】

■大会参加費等振込期日：2011年5月27日（金）

※大会準備の関係上、事前のお振込みにご協力願います。（最終期限として5月27日を設定させていただきます。）
万が一、期日を過ぎて振込みなされた場合には、必ず「振込受領書」などの振込みを証明できるものを受付でご提示ください。振込みが確認できない場合は、当日大会参加費を頂くこともありますので、ご了承下さい。（文責：井ノ口貴史）

「9.11」後の平和教育の成果と課題

京都橘大学 井ノ口 貴史

2011年は、湾岸戦争から20年目、「9.11」から10年目にあたります。湾岸戦争からの10年間と「9.11」からの10年間では、明らかに国際理解教育をめぐる環境は大きく変化しています。湾岸戦争時、空爆下の詳細な情報は、バグダッドにただ一人踏みとどまり、54日間CNNのライブ中継を続けた記者ピーター・アーネットが発信するものがほぼ唯一でした。湾岸危機・湾岸戦争の時、「イラクがクウェートに攻め込んだのはなぜなの」「アメリカはイラクを攻撃するの」などの生徒が発する様々な問いに応える授業を仕組めた教師がどれだけいたでしょうか。刻々と変化し予測がつかない事態を、テレビと新聞の報道だけで授業に仕組んでいくには限界がありました。

しかし、冷戦後、軍事技術が民間に開放され、インターネット網が世界に張り巡らされたグローバル化の時代に起きた「9.11」後のアフガン空爆やイラク戦争、パレスティナ自爆攻撃とイスラエルの報復空爆などでは、攻撃にさらされる当事者やフリーランスの記者が、現地からリアルタイムに情報を発信し、世界中の人々が生の情報を瞬時に手に入れることができるようになりました。

過去、第14回大会（京都ノートルダム女子大学 2004年）のミニシンポジウムで、「9.11以降の国際理解教育を考える」というテーマで取り上げられていますが、この10年間、学校現場ではどのような実践が積み上げられてきて、どのような成果や課題が見えてきているのでしょうか。

本シンポジウムでは、イラクやアフガンの現地取材や現地の子どもの支援を続けながら日本の学校で戦争を伝える活動をしているジャーナリスト西谷文和さん、学校現場で平和教育を行っている実践家、そして国際理解教育の研究者が、「9.11」以降の平和教育の成果と課題を考えます。

「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」

聖心女子大学 永田 佳之

国連総会で定められた「ESD（持続可能な開発のための教育／持続発展教育）の10年（2005～2014年）」が中間年を過ぎ、世界各地で多彩な実践が行われるようになりました。一方、「環境教育とはどこが違うのか」「ESDならではの実践とは何か」「ESDが依って立つのはいかなる理論か」などの疑問に対していまだに明確な答えのないまま折り返し地点を過ぎたという見解もあるようです。

第21回研究大会では、道半ばではありますが、こうした問いかけに対する応答を意識して、これまでの研究活動で検討してきた4つのアプローチについて紹介し、持続可能な未来に向けた教育への眼差しを皆様と共有する機会にしたいと思っております。

具体的には、授業やカリキュラム、学校運営、地域課題解決という切り口からESDの実践を可能にするアプローチを提示します。授業については問題解決を通じた価値創造を目指すヒューリスティック・アプローチを、カリキュラムについては持続可能性というエレメントをどの教科にも埋め込むインフュージョン・アプローチを、学校運営については学校全体でESDに取り組むホールスクール・アプローチを、地域社会については地域特有の課題を学校のみならず地域の潜在的な力を活かしながら解決していく地域課題解決型アプローチを国内の実践を紹介しつつ取り上げる予定です。

2014年に日本で開催することが決まっている「ESDの10年」の締めくくり会合も視野に入れつつ、第21回研究大会での皆様との討議を活かしながら今後も研究活動を続けていく所存です。大会当日、忌憚のない意見交換ができることを心待ちにしておりますので、ふるってご参加ください。



大会自由研究発表に 61題目がエントリー

日本国際理解教育学会第21回大会自由研究での発表を募集しましたところ、2月末日までに61題目の発表申し込みがありました。以下に、発表者氏名（所属）と「発表題目」を掲載致しますので、ご覧下さい（掲載の順番はアイウエオ順です）。

自由研究の発表者（所属）と「発表題目」

1. 阿部 一郎 (NPOたぶんかびと)「多文化社会におけるコーディネーターの役割とNPOの可能性について」
2. アッカーマン・ペーター (エアランゲン大学)「『文化的多様性』-日独共同ゼミにおける相互理解の問題点」
3. 荒川 裕紀 (国立北九州工業高等専門学校)「高等専門学校の歴史教育における多文化共生の実践-近現代史での移民史・文化事象を題材として-」
4. 伊井 直比呂 (大阪府立大学)・益川 直子 (豊中市立上野小学校)・大島 弘和 (大阪府立北淀高校)・皇甫 康子 (池田市立呉服小学校)「持続可能な世界を担う児童・生徒の世代内・世代間の"学びあい"の意義」
5. 池田 恭子 (立教大学大学院)「海がつなぐ日本とハワイの教育交流：これからの教育における異文化間の学び合いと、伝統知と現代技術の融合の可能性」
6. 石川 一喜 (拓殖大学)「『ハーバード白熱教室』は国際理解教育で有効か？"学び"の本質を問う」
7. 石森 広美 (宮城県仙台東高校)「高校の国際理解教育における形成的アセスメントの導入」
8. 居城 勝彦 (東京学芸大附属世田谷小学校)「機織りを通して世界を眺める-小学校1年生の実践から-」
9. 市川 秀之 (名城大学)「国際理解教育における共創型対話に関する考察」
10. 市瀬 智紀 (宮城教育大学)「地域の学校におけるESDと地球的課題の展開についての一考察」
11. 伊藤 勝久 (苫小牧駒澤大学)「小学校のアイヌ民族理解教育の現状と課題」
12. 今田 晃一 (文教大学)・日比野 功 (東大阪市教育委員会)・木村 慶太 (立命館守山中学)・長田 朋之 (光塩女子学院初等科)「タブレット型情報端末 (iPad) の有用性~博学連携ワークショップでの実践より~」
13. 岩坂 泰子 (奈良教育大学教職大学院)・吉村 久恵 (香芝市立真美ヶ丘東小学校)・吉村 雅仁 (奈良教育大学)「小学校と大学との協働による国際理解教育としての外国語活動-人権教育の一環として」
14. 植木 節子 (千葉大学)・高橋 博代 (千葉大学教育学部附属中学校)「国際理解の興味を引き出す校外学習についての考察」
15. 梅野 正信 (上越教育大学)「判決書を活用した人権教育としての市民性育成教育に関する日韓の授業研究-3年間の科研報告から-」
16. 大津 和子 (北海道教育大学)・東峰 宏紀 (恵庭市立若草小学校)・田中 孝治 (恵庭市立若草小学校)「日韓中の相互理解を深めるための双六教材の開発」
17. 大野 順子 (桃山学院大学)「多文化社会における市民性育成に関する一考察~ニューカマー外国人女性の語りから~」
18. 小関 一也 (常磐大学)「国際理解教育と評価 (アセスメント)」
19. 笠井 正隆 (関西外国語大学短期大学部)「留学経験がグローバルシティズンシップに関する短期大学生の意識へ与える影響について」
20. 風巻 浩 (神奈川県立麻生高校)「高校生と見いだすKivaの可能性」
21. 金田 修治 (大阪府立三島高校)「Borneoの森から学ぶESD ~つながりを求めて~開発協力と国際理解教育」
22. 釜田 聡 (上越教育大学), 堀幸美 (江別市立大麻東小学校), 西村克仁 (同志社香里中学・高等学校), 許 信恵 (韓国・韓南大学), 金 多媛 (韓国・)「日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発~人間関係に着目した日韓中相互理解のための教材開発~」
23. 上別府 隆男 (東京女学館大学)「アジア地域大学間交流拡大へのシティズンシップ教育研究の貢献の可能性」
24. 川上 誠 (公文国際学園)「環境先進国ドイツに学ぶ風力発電用風車」
25. 河原 和之 (東大阪市縄手中学)「自衛隊海外派遣の是非を問う中学生-『紙上討論』から『パネルディスカッション』まで」
26. 菊地 恵美子 (早稲田大学大学院)「日常と世界をつなげる国際理解教育のデザイン~『ハンガーマップ』を題材としたワークショップ開発と実践から~」
27. 久保 哲成 (兵庫県立柏原高校)「学校設定科目『アジア地誌』・『異文化交流』を通じた国際理解教育の実践」
28. 小島 文英 (国際基督教大学)「グローバル化時代のカリキュラム要件：相対化の扱いに関する一考察」
29. 坂出 義子 (バーミンガム大学)「英国の小学校における平和教育-多文化社会における平和的共生への試み」
30. 鹿野 敬文 (福岡県立福岡高校)「アラブ、イスラム理解への糸口」
31. 曾我 幸代 (聖心女子大学大学院)「イギリスにおけるサステナブル・スクールのためのナショナル・フレームワークの再考」
32. 高橋 洋行 (横浜保育福祉専門学校)「フランスの市民性育成に見られる道徳的寛容性の理論とその役割~学校教育における国家的枠組みを超えた道徳性の育成~」
33. 高松 美紀 (東京学芸大学大学院)「高校生の国際理解に対する意識 -つながりの構築という視点から-」
34. 田島 弘司 (上越教育大学), 茂木淳子 (上越市大手町小学校), 芳賀拓也 (上越教育大学大学院)「コミュニケーション

能力の育成を促すアルパカの飼育活動」

35. 辻 良隆 (大阪市立南高校)「シミュレーションゲーム考—実践者の立場からオリジナル教材を考える」
36. 永田 佳之 (聖心女子大学)「アジアの「次世代リーダー」が持続可能性と向き合うとき — 水俣及び五島列島におけるESDスタディツアーの試み —」
37. 中山 京子 (帝京大学)「移民をテーマにした日韓共通教材の作成と実践」
38. 中山 博夫 (目白大学), 若井知草 (目白大学)「『日韓中の協働による相互理解のための国際理解教育カリキュラム・教材の開発』『人間関係—言葉と生活文化』グループの研究経過」
39. 服部 圭子 (近畿大学), 岡 憲司 (帝塚山学院泉ヶ丘高校)「留学生をテーマとした日中韓共通教材の作成と実践」
40. 濱島 功 (神奈川県湯河原町立吉浜小学校)「国際理解教育を視野に入れた小学校社会科地域学習」
41. 林 加奈子 (桜美林大学)「内発的発展に向けての地域事例にみる参加と参加型学習」
42. 方 政雄 (兵庫県立淡川高校)「授業実践『在日コリアンの姓名について』—文化的・民族的アイデンティティの表象である『名前』が保障される共に生きる社会をめざして—」
43. 福山 文子 (お茶の水女子大学大学院), 中山京子 (帝京大学), 服部圭子 (近畿大学), 森茂岳雄 (中央大学), 末永サンドラ輝美 (太田市立太田小学校), 大船ちさと (国際交流基金マニラ文化センター)「日系ブラジル人をテーマとしたカルタ教材の開発—移民学習と日本語学習をつなぐ—」
44. 藤崎 隆博 (鹿児島大学大学院)「小学校におけるアクティブ・シティズンシップを育成する国際理解教育」
45. 藤原 隆範 (広島大学附属中・高校)「他国のユネスコ・スクールとの交流プログラムの開発—ドイツ・カールスルーエ市のユネスコ・スクールを事例に—」
46. 松井 克行 (大阪府立旭高校)「戦没者追悼の在り方から考える国際理解—高等学校公民科における授業実践を手がかりに」
47. 松村 淳 (岩国市立愛宕小学校)「和解や紛争解決の意識や概念、行為を育成する小学校社会科学習」
48. 丸山 英樹 (国立教育政策研究所)「ユネスコスクール・ネットワークの成果と課題」
49. 南 美佐江 (奈良女子大附属中等教育学校)「異文化交流からの学びと変化—国際交流プログラムYES for ESDの実践から—」
50. 宮野 祥子 (早稲田大学大学院)「地域日本語教育における感性育成アプローチ—その理念と実践—」
51. 村田 京子 (千葉県立千葉中学)「『世界の檜舞台へ』—学年縦割りのゼミ活動を通して 開発教育の実践—」
52. 森川 与志夫 (奈良県立法隆寺国際高校)「外国にルーツを持つ高校生たちの交流活動実践の意義と課題」
53. 山田 幸生 (葛城市立磐城小学校), 木村 慶太 (立命館守山中学校), 高宮 智恵美 (立命館守山中学校), 吉田 誠 (奈良教育大学)「デザインから広がる国際理解—家紋・トーテムシンボル・アジnkラの共通性を通じて—」
54. 山西 優二 (早稲田大学), 宮野 祥子 (早稲田大学大学院), 林 加奈子 (早稲田大学大学院), 竹本 紗野香 (早稲田大学大学院), 村越 俊 (早稲田大学大学院), 佐藤 雄介 (早稲田大学大学院), 佐藤 美和 (TCC日本語学校)「SDの事例からみるESDの特質と課題」
55. 祐岡 武志 (奈良県立法隆寺国際高校)「世界遺産教育とESD—「文化の多様性」の学びより—」
56. 横田 和子 (聖心女子大学)「国際理解教育における文化的多様性の役割とは—Post-Traumatic Growth (外傷後成長)の概念を手がかりに」
57. 吉田 直子 (聖心女子大大学院)「沖縄へのまなざし—沖縄への修学旅行の分析を通して—」
58. 金久保 紀子 (筑波学院大学)・小野寺 志津 (筑波学院大学)「つくば市におけるディスカッション型日本語コンテストの試み」
59. 長濱 博文 (九州女子大学)「国民形成においてユネスコの価値に期待される統合機能—フィリピンとオーストラリアの事例を中心に—」
60. 栗山 丈弘 (文化学園大学)・藤原 孝章 (同志社女子大学)「食をテーマにした日韓共通教材の作成と実践—ラーメン編」
61. 栗山 丈弘 (文化学園大学)・織田 雪江 (同志社中学校)「食をテーマにした日韓共通教材の作成と実践—お米編」

自由研究発表での留意点

①発表抄録の作成について

発表抄録は、発表要項(送付済み、大会ホームページにも掲載)の書式、見本等に基づいて、A4判2ページで作成して下さい。本年度は例年同様、提出された原稿をそのまま原稿といたしますので、完成原稿をA4判でお送り下さい。

抄録原稿の提出期限が4月15日(金)【郵送必着】となっております。提出期限に遅れますと抄録集に掲載できない場合もありますので、締切には十分にご注意いただきますよう、お願いいたします。

②使用機材について

分科会の各会場には基本的に大画面モニター、VHS、DVD、CDプレーヤーが付設されておりますが、パソコンについては各自ご用意下さい。

③配布資料について

抄録に掲載されている発表内容以外に、配布資料が必要な場合は、1つの発表につき最低40部を事前にご用意ください。研究大会実行委員会が印刷をお引き受けすることは致しません。

④発表時間について

発表の持ち時間は発表を30分(発表20分、質疑応答10分)とします。

フロアとの活発な意見交換のため、発表者は質疑応答時間が十分に取れるようにご配慮下さい。

では、会員の皆様のお越しをお待ちしております。

(文責 井ノ口 貴史)



図書館：女性史・女性学関係の文献を集めたコーナーなどがあります

韓国国際理解教育学会大会の報告

宮城県仙台東高等学校 石森 広美

大会概要

韓国国際理解教育学会第11回大会は、APCIU（アジア太平洋国際理解教育センター）の協力の下、2010年11月13日（土）にソウル大学を会場に開催された。今年の大会テーマは、「国際開発協力と国際理解教育」（International Development Cooperation and Education for International Understanding）である。

私は韓国学会に参加したいという希望を常々持っていたものの、なかなか仕事との折り合いがつかず実現できなかったが、今回念願が叶って参加することができた。参加にあたっては、釜田聡会員（上越教育大学）が窓口となって煩雑な事務を取りまとめてくださった。日本からは多田前学会長を含め10名の会員が参加した。私を含め初めての参加という会員も複数おり、直前までメールのやりとりをしながら情報交換や自己紹介などをし、モチベーションを高めていた。直接会場での顔合わせとなり、一人タクシーで会場に到着し心細く感じていた時、韓国の学会員の方々が優しく話しかけて歓迎して下さい、安堵したのを覚えている。

大会の流れは次の通りである。

- 09:00-09:30 受付
- 09:30-12:30 研究発表
- 12:30-14:00 昼食
- 14:00-14:30 総会
- 14:30-17:00 講演・シンポジウム
- 17:00-18:00 総括・ディスカッション
- 18:30-20:00 夕食・懇親会

シンポジウム・自由研究発表

自由研究発表は、第1分科会～第6分科会に分かれて行なわれた。日本からは6本（7名）の発表があった。私が参加した第1分科会では、学生のボランティア活動の意義やスタディーツアーの検証など、実践的な内容を占めた。

午後のセッションでは、3名から話題提供があった。日



自由研究発表第一分科会の参加メンバーで記念撮影



パネルディスカッションの様子

本から多田孝志前学会長が「国際開発協力と国際理解教育」について、日本における国際理解教育の施策の検討を踏まえたうえで、21世紀を担う子どもたちの国際開発協力の基盤となる資質・能力・技能育成の鍵として創造的関係構築力、統合的な知、共創的対話力の必要性を提起した。漢城大学校教授の李太周氏は「国際開発を通してみる世界市民教育」と題し、国内外の国際開発協力および世界市民教育の事例を通して、国際理解教育の意味と地球市民としての意識を問い直し、韓国の国際開発教育のあり方を提示した。また、大丘カトリック大学校教授の李貞玉氏は、「世界体系の中の韓国と韓国の国際理解教育」について、今日の世界全体における韓国の位置を時間的・空間的次元から検討し、それを背景として韓国で必要とされる国際理解教育の方向性を説いた。その後、日本から浅川和也会員も討議参加者として登壇し、国際開発協力についてパネラーとフロアーの双方向により熱心な議論が交わされた。

熱いおもてなしに感謝

日本からの参加者一同は、韓国国際理解教育学会の方々の温かな歓迎とおもてなしに感激した。大学内のレストランでの夕食会の後は、最近韓国の若者に人気が高まっているというワインバーに連れて行って歓待して下さった。時には真剣な議論や意見交換を、時にはジョークで笑い合う、非常にアットホームで楽しいひと時を過ごさせていただいた。そうした充実した時間によって、現場で国際理解教育を実践する活力を再びチャージすることができた。これも、これまで何年にもわたってパートナーシップを築き、友情と信頼を深め合ってきた諸先輩方、両学会の先生方の努力の賜物である、と心から敬意を表すとともに感謝申し上げます。最後に、韓会長はじめ韓国国際理解教育学会の皆様、ご尽力くださった皆様に...ありがとうございます。日本または韓国での再会を楽しみにしております。

東日本大震災に際し、大津和子学会長・藤原副会長を始め、多くの学会の先生方からお見舞いや励ましのお言葉をいただき、気持ちが暖まりました。人とのつながりについて、改めて感じ入る数週間でした。

中国における国際理解教育の新たな一歩

中国北京師範大学国際・比較教育研究院 姜 英敏

中国の小中学校で国際理解教育が急速に広がるなか、「国際理解教育研究センター成立&国際理解教育セミナー」が去年の11月27日北京師範大学国際・比較教育研究院主催で開催されました。学会のような国際理解教育関連の専門組織がなく、現場の実践と理論研究のつながりが乏しい現状で、この研究センターの設立は中国の国際理解教育にとって大きな出来事ともいえます。記念セミナーには河南省、四川省などの地方から、北京の高等教育機関、教員研修機関、学校現場の教師などの研究機関や現場の教師からなる70名程度の関係者が集まりました。韓国、日本の国際理解教育学会からも暖かいご応援をいただき、日本からは大津和子会長、森茂副会長がご出席、報告をなさいました。

国際理解教育研究センターの目標：「架け橋」と「窓口」

同セミナーは、研究センター設立記念式典と、国際理解教育研究報告二つの部分に分けて進行されました。まず、記念式典ではアジア太平洋地域国際教育・価値教育ネットワーク（APNIEVE）のチェアマン周南照教授の祝辞の後、センターの主任を担当するようになった私がセンターの設立主旨と目標について報告いたしました。特に、同センターは国内においては現場の実践と理論研究をつなぐ「架け橋」、海外においては積極的に研究交流と協力を行う「窓口」の役割を目指していくことを強調しました。続いて中国教育学会の顧明遠会長が、21世紀における人類共生の重要性を強調し、国際理解教育は人間の疎通と理解の架け橋であり、平和を広げるの種であるという内容のスピーチを行いました。最後にはアジア・太平洋地域国際理解教育研究院（APCEIU）のイ・スンファン院長が国際理解教育の時代的使命、APCEIUの機能と役割について言及しながらセンターの活躍に期待を寄せました。



発表する大津和子会長と森茂岳雄先生



研究報告：今日中・日・韓における国際理解教育の課題と成果

休憩を挟んで国際理解教育研究報告の部分に入りましたが、日本側からは大津和子先生が日本における国際理解教育の理論、日韓中共通国際理解教材開発プロジェクトの全体像を紹介し、現在開発進行中の教材である「相互理解のための旅行」を事例に説明をしました。森茂岳雄先生は、もうひとつの事例である移民教材開発について説明をしました。韓国側からは、国際理解教育学会のカン・スンウェン副会長がポストコロニアリズムの視点から韓国の多文化教育の問題点を批評しました。中国側からはまず国際理解教育教材開発や教員研修の経験を持つ北京教育学院から教材開発、教員研修の成果と問題について説明があり、中国内地の四川から来られた西南大学の徐輝・王正清は平和教育のビジョンについて個人の見解を披露しました。最後には私が、北京師範大学と中央大学の間で3年間続いた国際理解のための交流授業を事例とした研究過程について発表しました。

発表終了後のディスカッション時間では「地球市民」の概念、移民教材の設定原因などをめぐり、熱い議論が行われました。

一日という短い時間でしたが、多くの中国の参加者にとってこのセミナーは中国、日本、韓国の国際理解教育の経験と課題を共有し、それぞれのアイデアを聞く貴重な機会となりました。

中国の国際理解教育は著しい発展を遂げている一方理論構築や実践研究が不十分なため、さまざまな課題を抱えています。その意味からしても国際理解教育センターのやるべきことは非常に多いと思います。センターの発展を祈念すると同時に、国際理解教育の豊富な経験をもつ日本そして国外の関連機関と交流と協力を続られたらと期待しています。



セミナー参加者の集合写真

特定課題研究プロジェクト報告

「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」 ～会員どうし、ESDのフロンティアを分かち合う～

聖心女子大学 永田 佳之



自由学園で実践者も研究者もESDを討議

現在、ユネスコを主導機関としてESD（持続可能な開発のための教育／持続発展教育）が世界各地で展開されています。国連は2005年からの2014年までを「国連ESDの十年」と定め、日本でも多彩な実践や研究が行われるようになりました。

このような持続可能な未来への教育運動が展開される中、学会ならではの役割を意識して、本研究会はこの2年間ほど、活動を続けてきました。ここではこれまでの活動内容を次の3つのトピックに分けて、ご紹介いたします。

ESDの相対化

ESDという国際運動は確かに2005年から始まっていますが、持続可能な社会（未来）と教育の関係性については、つとに考察されてきました。また、「ESDの十年」にピリオドが打たれる2014年をもって持続可能な社会に向けた教育の営為もその使命を終えてよいわけではないことは言うまでもありません。本研究会では「ESDの理論」を学ぶという姿勢ではなく、ESD誕生以前の理論、もしくはESDのような運動を生み出してきた思想に学びつつ、ESDを捉え直す知見を養うことを目指して始めました。

具体的には、G. ベイトソンの学習論に注目し、ESDにとって重要な理論を分かち合いました。その他、邦訳されていなくても重要な文献、例えば、D. オー著 *Earth in Mind*などの教育論や、ESDの論客であるS. スターリンの博士論文なども参考にしながら、ESDを捉え直す研究会をもちました。

ESDに関する検討

本研究会では、ESDを研究対象とする際、あえてESDの‘E’（教育）を切り離して、‘SD’（持続可能な開発／発展）という視座から教育を捉え直すという視点も重視してきました。多元的価値社会や共生社会などの概念をキーコンセプトに、脱成長の時代における教育の在り方を考え

る際の可能性のひとつとしてESDを捉え、研究を続けています。西川潤氏や内橋克人氏、さらには最近注目されている、セルジュ・ラトゥーシュ氏の〈脱成長〉や〈ポスト開発〉（『経済成長なき社会発展は可能か？』）なども注目していますが、まだ十分な討議を経ておらず、これからの課題です。本年5月には政治学者であり、日本ボランティア学会代表でもある栗原彬氏による〈サスティナビリティと教育〉についての公開講演を開催します。詳しくは本ニュースレターの「お知らせ—これからの行事／イベント案内」をご覧ください。

ESDを実現するためのアプローチ

実に多彩な実践がESDの名の下に出現するのに、ESDという「総体」はいまだに把握しづらいという指摘があります。このような問題を想定した場合の学会ならではの役割とは何かを意識し、本研究会では学校等の現場で活かしていただけるような4つのアプローチを検討している最中です。研究者と実践者の集う本学会の特性を活かして、両者が共にフィールドを訪れ、そこから学びつつ、ESDに相応しいアプローチを明らかにしていこうという試みです。すでに昨夏、学校訪問プログラムとして「自由学園でESDを考える」を開催し、同学園に内在するESD的とも言えるホールスクール・アプローチを体験型で共有しました（日本国際理解教育学会ニュースレター第37号No.1「自由学園でESDを考える」を参照）。本年6月の全国研究大会では、授業やカリキュラム、学校運営や地域社会の形成に至るまで持続可能な社会の実現に向けていかなるアプローチが有効なのか、会員の皆様と一緒に考えたいと思っております。

以上の活動の延長線上に2014年の国際大会（「ESDの十年」の締めくくり会合）を視野に入れつつ、今後も活動を展開していく所存です。公開講演会などは学会ホームページにて掲載しますので、ふるってご参加ください。



聖心女子大学での研究会

文化的多様性と国際理解教育

聖心女子大学 横田 和子

今年度新たにスタートした本研究の目的と背景についてご紹介します。

共生社会の構築を目指す国際理解教育において文化は要であり、文化的多様性が学習項目として欠かせない視点であることは間違いありません。文化的多様性について学ぶこと、文化的多様性を通して学ぶことといった実践面、そして国際理解教育とのかかわりにおける理論面から、それらを検討していく作業は必須のものと考えます。しかし国際理解教育で単に多様性を賛美し、実質スローガンにしてしまうことだけは避けねばなりません。多様性と自由はどう異なるのか、民主主義や人権との関係、言語や宗教との関係、感性や芸術の役割、家族のあり方や地域の課題、多文化主義との関係など、考察すべき問いは山積しており、更にそれらを国際理解教育でどう捉え、どのように学びに活かしていくのかという問題があります。もちろん、ここでいう文化とは何かという問題もあります。文化的多様性と国際理解教育との関係は、一見自明のもののようにみえながら、まさしくそれ自体が多様性に富んだ難問であるといえます。この難問とどのようにつきあうことが可能なのか。これらの問いに向き合い、そしてこの概念を学びに活かすことで、平和の文化の創造、あるいはユネスコのいう人類の精神的連帯への道を見出すための教育を模索することはできないだろうかという想いから、本研究を構想しました。

特に筆者が関心を寄せているのは、有用性や合理性では説明できない、人間が感性的人間であるためにそれを必要とするような営み、そこから生まれる文化の多様性です。たとえば宗教や芸術、祝祭などの役割は、見逃すことはできません。国際理解教育における文化的多様性の役割は、経済性や合理性のみに従属しない、固有性や神秘性に富んだ、ときには一見わかりづらい世界をこそ豊かに描き出すためのものであるはずだと考えるからです。

本研究の主な課題として3点をあげておきます。

①国際理解教育において文化的多様性の概念が果たしてきた歴史的な役割を把握し、再考すること

国際理解教育が紡いできた、従来対話が見出しづらかったもの同士を引き合わせる磁場として動いてきた歴史を踏まえながら、文化的多様性の概念が果たしてきた役割を分

析し、その概念を再考します。

②文化的多様性に根ざす国際理解教育における学習の視点やスキルを検討すること

国際理解教育において文化的多様性の概念を生かし、またその意義を学び、そこに貢献するための学習の視点やスキルについて検討します。たとえば身体・言語・ケア・アート・スピリチュアリティ等の視点を生かしつつ、文化的多様性に根ざす学びがより当事者性及び身体的実感を伴って学ばれるための、国際理解教育からの何らかの提示を行います。

③海外の動向、および多様化する国際理解教育の動向を文化的多様性の視点から検討すること

①②の課題も含めて、文化的多様性の概念が、実践にどのように活かされているのか、海外の動向も含めて検討します。また、ESDや世界遺産教育など多様化しつつある国際理解教育の動向にも注意し、国際理解教育を深化させるための文化的多様性の概念の役割と課題を検討します。

国、地域、家庭、個人など、どのようなレベルであれ、異なる文化が会うところではさまざまな葛藤が生じます。しかしながら現実にはそこで葛藤せずにある特定の国家や宗教を悪役にすることもしばしば行われています。そのような現状を踏まえながら、これから文化的多様性をめぐる旅をはじめたいと思います。文化的多様性について学ぶことは、何かすっきりとした解答にたどりつけるものではなく、学習者である私たちを葛藤させ、引き裂き、ときには苦しい選択を迫るものとならなければ、本質的な学びにはならないのではないかという予感がしています。文化的多様性とは何か、なぜそれが必要なのか、学習者が身をもって学び、学習者自身の生きている社会と文化の絡み合いの中で、しなやかにかつたたかに「文化的多様性を生きること、生きていくこと」を支援する学びとして、国際理解教育が提示できるものを本研究を通して見出し、その成果を今後の国際理解教育を創造する上での質的な根拠としていくひとつのきっかけにできればと考えています。

今年度は公開研究会も開催を予定しています。会員の皆様の積極的なご協力とご参加をお願い申し上げます。

全国各地の研究会からの報告

世界遺産学習全国サミットの報告

— 奈良から全国へ —

奈良教育大学 田淵 五十生



全国サミットの開会式

2010年11月28日、奈良教育大学で「世界遺産学習全国サミット」が開催され、幼稚園から大学までの実践報告が24本、11の分科会で発表された。2007年度、第1回実践研究会が開催されて本年度は4年目であるが、第1回が212人、第2回が347人、第3回が547人と参加者は徐々に増えて今回は804人に達した。日本全国ならびに海外からの参加者もあり、世界遺産を通してESDに迫るわれわれの実践研究会は着実に定着しつつある。

今回は、世界遺産を持つ7つの地方自治体、暫定遺産を持つ6つ地方自治体の教育委員会の代表が集い「世界遺産学習連絡協議会」を結成して、今後は全国的に世界遺産学習を展開することが確認された。

約5年前の2006年2月、筆者が発起人になって、当時の日本ユネスコ国内委員会事務局長補佐の浅井孝司氏を招聘し「ユネスコの提起する教育をどう受け止めるか」と題するミニ・シンポジウムを開催した。その時の参加者は僅か24名であった。実は、そこから出発したのである。それゆえに、13の地方自治体の教育委員会の代表がステージに登壇した時、筆者には万感の思いがあった。

当日、「持続発展教育（ESD）と世界遺産学習」と題してシンポジウムが開催された。コーディネーターを筆者が務め、3人のシンポジストから提案があった。一人は、文科省国際教育協力室長の浅井孝司氏で、世界遺産教育はユネスコの「フラッグシップ事業」（主要な取り組み課題）であり、ESDのツールとしても非常に有効であるとの指摘があった。

その二人は、韓国国際理解教育学会会長の韓敬九ソウル大学教授である。「国民国家が声高に文化を強調する時には、その政治性に自覚的でなければ、ナショナリズムやエスノセントリズムに掬い採られてしまう」と文化人類学の立場から警鐘が発せられた。最後に登壇したのは、奈良市教育委員会学校教育課長の石原勉氏で、「奈良市教育委員会は、全市をあげてESDの視点に立った世界遺産学習を展開している」という報告があった。

筆者は、シンポジウムのまとめとして、世界遺産のロゴマークとミレーの名画「晩鐘」を映像で示して、「世界遺産教育は、自然への畏敬の念、文化遺産を作り守り続けてくれた人々への感謝、周囲の人々の支えの中で世界遺産の地で学び、過去から受け継いできた世界遺産のバトンリレーのランナーとしての自分自身への気づき、換言すれば地域へのアイデンティティーや自尊感情（セルフエスティーム）を目指すものでありたい」と述べた。

そして、「現在、学力論が喧しいが、知識や技能など計測可能な学力と、周囲への感謝や自己受容の態度など、数値では計測不可能な学力がある。世界遺産学習は、自己受容の態度や自然や周囲への感謝の念など、数値では測れない内面性を育む教育を目指したい」と総括してシンポジウムを閉じた。

2011年3月で筆者は奈良教育大学を去るが、世界遺産学習を推進するためのセンターが設立され、奈良市教委の中澤静男氏を専任講師に迎えて持続可能な状態になっている。



世界遺産のロゴマークを通してのシンポジウム

全国各地の研究会からの報告

「第9回MIA夏期教員ワークショップ2010～感じる！共感する！国際理解教育～」報告

早稲田大学 山西 優二



2010MIAワークショップ分科会の様子1

武蔵野市国際交流協会（MIA）は、国際理解教育をテーマに月1回開催の「教員ワークショップ」を2000年度より11年間にわたり実施し、またその一環として、「教員ワークショップ」参加者が自らの経験を基礎に企画・運営する「MIA夏期教員ワークショップ」を2002年度より実施してきている。日本国際理解教育学会も後援団体として夏期教員ワークショップを支援してきているが、2010年7月29日・30日の両日、「感じる！共感する！国際理解教育」をテーマに、66名の当日参加者と37名のスタッフが参加する中で開催された「第9回MIA夏期教員ワークショップ2010」の概要を報告する。

MIA夏期教員ワークショップの目的・内容

MIA夏期教員ワークショップは大きく3つのことを目的にしている。その第一は、国際理解教育の理念やその実践方法に関する基本的なことを多くの教員間で確認することである。第二は、年間を通して「教員ワークショップ」で学んできた新たな事柄（テーマ）を、その参加者が「MIA夏期教員ワークショップ」の他の参加者に伝え、共有することである。そして第三は、地域の多くの団体・機関と協働し学習プログラムを検討・作成することである。これらの目的に基づき2日間のワークショップが企画・運営されるため、ワークショップの内容は、かなり多彩なものになっている。

第9回の内容は6部構成になっているが、目的別に整理してみると、「国際理解教育の基本の確認：第1部・第2部」、「新たな事柄（テーマ）の共有：第3部」、「学習プログラムの協働作成：第5部」となり、第4部・第6部はそれぞれ初日及び二日目の振り返りの場であり、また初日の夜には参加者による特別企画「自主ラウンド」の場が設定されている。2010年度のテーマは「感じる！共感する！国際理解教育」であったため、第1部の導入では、モンゴル出身のグライさんによる馬頭琴の演奏とその演奏の印象を色で参加者が表現するワークショップがアイスブレイキングとして実施され、第3部では「音と国際理解：心の音を聴く～サウンドスケープ～」 「笑い」と国際理解：漫才ワー

クショップ」「まちづくりと国際理解：共感から生まれるまちのデザイン」「演劇と国際理解：多様性を認めあえるつながりづくり」といったユニークな分科会が実施された。そして第5部では参加者は、「ビデオレターでお悩み解決！～フィリピンからのお返事編～」「ストリートチルドレンの気持ち」「部活やクラブ活動de国際協力」「学校大好き～外国につながる子どもたちのために～」という4分科会に分かれ、「ACTION」「シャプラニール＝市民による海外協力の会」「国際協力機構（JICA）」「ピナツボ復興むさしのネット」などの団体との協働のもと、約5時間に及び実践プログラムの作成・検討に参加した。

MIA夏期教員ワークショップの特徴と意義

私自身、9回連続してMIA夏期教員ワークショップに参加しているが、毎年感じることであるが、そこには元気な教員の姿がある。毎月開催される「教員ワークショップ」での学びを軸に、教員自らが「MIA夏期教員ワークショップ」を企画・運営するという主体性・自主性とその元気は呼応しているように感じられる。

またこのワークショップには、毎年何か新しいテーマや方法を提示しようとする想いが見てとれる。学校教育の現場で多くの問題を抱えながらも、何か新しい切り口で状況を変えていこうとする教員の想いが、今年の「感じる！共感する！国際理解教育」といったテーマにも示されている。

さらには学校の中ではなく地域に、小学校・中学校・高等学校の教員さらには地域の団体関係者が共に集い、理念・実践方策を学び、また自らの実践を省察しあう場があることの意味は、時には学校教育を相対的に捉えなおすという意味からも、あまりにも大きい。

そしてこのような意味ある場をコーディネートしているのは武蔵野市国際交流協会のスタッフである。学校と地域の連携の重要性が叫ばれる中で、コーディネーターの役割やその専門性のあり様をこのワークショップは具体的に提示してくれている。



2010MIAワークショップ分科会の様子2

『現代国際理解教育事典（仮称）』編纂について

目白大学 多田 孝志

日本国際理解教育学会では、大会開催20周年行事の一環として、記念図書『グローバル時代の国際理解教育－実践と理論をつなぐ－』（藤原孝章編集委員長 2010年刊行）に次いで、『現代国際理解教育事典（仮称）』を刊行することとなりました。趣旨・経緯等は以下の通りです。

事典編纂の趣旨

地球社会の現状を看視するに、地球温暖化や経済格差の増大、貧困・飢餓などに象徴される地球的課題が顕在化し、また、多文化共生社会の現実化が進行し、そうした時代に対応した資質・能力・技能をもった人間の育成が求められている。

教育界の現状は、持続可能な開発（発展）のための教育、欧州の民主教育の推進、ユネスコ協同学校の復興など、新たな教育の動きが起きている。教育行政では「初等中等教育における国際教育に関する推進検討会議」報告書が出され、また、「総合的な学習の時間」の減少、小学校外国語活動が創設されるなどの施策が実施され、学校現場での国際理解教育のあり方、実践に影響を与えてきている。

学校外においては、地域における人権や開発のあり方をめぐってNGO/NPOの国際理解教育への関心が増し、国際理解教育の学習領域や関連領域が、学校だけではなく地域においても拡大してきた。国際理解教育の学習方法についても、博物館等、多様な教育資源の活用、地域ネットワークとの連携など、さまざまな手法が開発・実践されてきている。

こうした状況をみると、本学会が、学会大会20周年を期して、国際理解教育の理念、実践方法等を総合的に網羅した『現代国際理解教育事典（仮称）』を刊行すべき時期を迎えたと判断した。

刊行にあたっての準備作業

- 2009年6月の研究大会（同志社女子大学）にて、多田孝志会長（当時）から提案があり理事会で承認された。
- 2010年3月の理事会において、学会の活動として『現代国際理解教育事典（仮称）』の刊行が確認され、編纂委員会の構成員として多田孝志（委員長）、大津和子、藤原孝章、森茂岳雄、中山京子が決定された。
- 2010年4月に編纂委員会が開催された。委員に加え、出

版社の責任者も参加し、以下の方向について共通理解を得た。

- ・名称を『現代国際理解教育事典（仮称）』とする。
- ・項目の記述は、単なるキーワードの一般的解説でなく学会としての視点を示す。
- ・学問的な刊行物としての水準を保つため概ね2年の年月をかける。
- ・実践者が多い学会の特色を生かし、特徴的な実践も取り上げて解説する。
- ・20周年記念図書の構成に準じた内容構成とし、カテゴリーを構成する。
- ・A5サイズ 5000円弱 横書きとする。・出版社：明石書店とする。

執筆者決定と原稿締切り

掲載する項目（案）を編集委員会で決定し、広く全会員から執筆者を公募した。

執筆者決定までのプロセスは以下の通りである。

- ・会員からの執筆希望を尊重する。
- ・複数の会員からの執筆希望のあった項目に関しては、専門性ととも、各希望者の執筆予定項目数を勘案し、できるだけ多くの会員が執筆できるように配慮する。
- ・執筆希望者のない項目については、編纂委員が協議し、同項目についての学識をもつ会員を選定し、依頼することとする。また、編纂委員も、できる限り分担して執筆する。
- ・執筆項目数、専門性などから全体を見直し、調整する。

第1次原稿締切り：2011年2月28日（2月末）必着

送付先：藤原研究室気付『現代国際理解教育事典』編纂委員会（下記）

〒610-0395 京田辺市興戸

同志社女子大学藤原孝章研究室

email: tfujiwar@dwc.doshisha.ac.jp

Tel&Fax. 0774-65-8596

日本国際理解教育学会が、学会の総力を結集し、21世紀の教育のあるべき方向を提言するための企画です。会員各位のご支援とご協力をお願いいたします。

2010年度理事会（各委員会等）報告

研究委員会より

筑波大学 嶺井 明子

研究委員会は第3回委員会を2011年1月9日に開催しました。会議の報告を含めて活動報告いたします。

1. 特定課題研究プロジェクトの推進状況

(1) 2010年10月新プロジェクトがスタート

前号のニューズレターにてお知らせしました通り、追加募集の結果、プロジェクト「文化的多様性と国際理解教育」（代表：横田和子）が2010年9月26日の常任理事会にて承認され、正式に発足しました。2012年度の第21回大会での成果報告を目指し進行中です。多くの会員の参加を期待しています。詳細は学会ホームページに掲載いたしますのでご覧ください。

(2) 2011年度はESDプロジェクトが成果報告

ESDプロジェクト、「持続可能な社会形成と教育：ESDの教育実践に関する総合的研究」（代表：永田佳之）が、2011年6月の第21回学会大会において特定課題研究としてその成果が報告されます。

(3) 新規プロジェクトの公募締め切る

2011年6月開始の特定課題研究プロジェクトの公募案内を、学会大会案内に同封しました（2011年1月上旬発送）。2月末で締め切った結果、2件の応募があり、現在審査中です。

(4) 終了プロジェクト

「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」プロジェクト（代表：嶺井明子）は、その成果を学会紀要にまとめる作業を終了し解散します。学会紀要第17号をご参照ください。

2. 検討中の課題

第3回研究委員会では「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」プロジェクトの成果をまとめる論文の査読結果の検討に多くの時間が費やされ、下記の点が継続審議となっています。

(1) 課題研究プロジェクトの公募の在り方

研究委員会の任期は3年であり、会員からの公募により1年に一つの研究プロジェクトを採択し実施している。しかし採択プロジェクトがなく追加募集した事例、新しいメンバーによる企画・参加が少ない実態、あるいはまた学会の理論的・実践的状况を見極めた上で、研究委員会として研究テーマを設定するプロジェクトも必要であるといった観点から、今後の公募のありかたを検討すること。

(2) 実践（研究）をいかに研究論文にまとめるか、こうした課題をテーマとする会を開催する必要性の有無、あるいは学会の既存組織との役割分担においてどこが担当するのがよいのかについて検討すること。

紀要編集委員会より

同志社女子大学 藤原 孝章

1. 学会紀要『国際理解教育』Vol17の編集作業について

現在、査読体制を組んで、編集作業に入っています。投稿原稿は21本でした（ちなみに、紀要15号では24本、16号では15本の投稿がありました）。このうち、特集テーマに関しては5本（研究2、実践2、ノート1）、一般テーマに関しては16（研究10、実践5、ノート1）ありました。全体的には、研究論文に質の高いもの（質的リサーチを方

法化したもの、実践をメタ的にみたもの）が多かったですが、他方、実践者の実践研究論文では少し力量不足を感じました。なお、特定課題研究については、プロジェクトチームおよび研究委員会において査読します（但し分量は4.5本分になります）。

2. 投稿規定の変更について

具体的には連続投稿の禁止やタイトルだけではなくキーワード（5つまで）をつけること、投稿段階からタイトル、キーワードの英文表記もお願いする。また、国際理解教育の固有性をはかるために、査読評価観点に「国際理解教育との関連」を追加することにいたしました。

3. 実践研究ノートのカテゴリーを設けることについて

実践研究論文の投稿数が少なくなっていることや研究論文としての質の確保との関連で、まずは、研究ノートと同じ分量（5頁、20枚相当）で、「実践研究ノート」を設ける。たとえば、学会HPなどで活用している実践フォーマットと実践のねらい、コメントをつけた実践報告の投稿を設けて、実践の現場にいる会員の実践や研究への関心を高めることをしてはどうか。もちろんフォーマットにこだわらなくてもよいし、学校だけではなく地域での取組み、実践も、このカテゴリーで投稿が可能とします。

以上、紀要編集に関わる投稿規定や新しいカテゴリーを設けることへの提案がなされ、詳細は編集委員会に任せるが、大きな方向性が承認されました。

理事会より

文化女子大学 栗山 丈弘

今年度第3回の理事会が、2010年12月12日（日）に中央大学駿河台記念館にて開催され、大津和子会長をはじめ理事18名、井ノ口貴史第21回大会実行委員長、事務局1名の計20名が出席しました。

今回の理事会では、新しい取り組みや連携に関する話題が多く報告・審議されました。その1つは、長年本学会が連携してきた北京師範大学に国際理解教育センターが設立されたことです。11月に開催された設立記念シンポジウムには、大津会長、森茂副会長が参加されました。

異文化間教育学会の呼びかけにより、異文化間教育学会や日本コミュニティ心理学、日本語教育学会と連携した公開シンポジウム「多文化社会を担う人づくり」に本学会も参加することになりました。

また、「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）の呼びかけによる、+ESDプロジェクトの普及委員会および幹事委員会に参加することも決まりました。+ESDプロジェクトとは、ESD活動等をウェブページへの登録を通じて、見える化、つながる化を進めることでESD活動の活性化を図るものです。

内部での新たな動きとしては、海外スタディツアー等の国際的な企画を立ち上げることが承認され、事業のあり方についてワーキンググループを組織し検討していくことになりました。また、学会のウェブサイトにも今後、英文ページを追加していくことになりました。

この他にも、現在進行している国際理解教育事典の編纂の進捗状況報告、恒例となっている韓国国際理解教育学会への参加報告、21回大会に向けた準備状況報告などがなされました。

お知らせ—これからの行事／イベント案内

「持続可能な社会形成と教育：ESDの実践基盤に関する総合的研究」公開講演会

本研究会では、ESDをはじめとした持続可能な社会を目指す教育について検討を重ねてきました。その中で繰り返し強調されてきたのはESD研究の前提としてのSD（持続可能な開発／社会／未来）研究の重要性でした。この公開研究会では、政治社会学者であり、立教大学名誉教授、日本ボランティア学会代表、水俣フォーラム代表でもある栗原彬先生をお呼びして持続可能な社会と教育について語っていただきます。ふるってご参加ください。

日 時：2011年5月14日（土） 15：00～17：00
場 所：聖心女子大学 2号館2階24番教室（東京都渋谷区広尾4-3-1）
講 演 者：栗原 彬 先生
演 題：「持続可能な社会と教育」（仮）
参加費：無 料
問い合わせ先：永田佳之（yoshy@pobox.com）

国立民族学博物館・日本国際理解教育学会共催 博学連携教員研修ワークショップ2011 in みんなく「学校と博物館でつくる国際理解教育」（予定）

国立民族学博物館を活用した国際理解教育の実践事例の紹介やワークショップを通して国際理解教育における博学連携の意義や可能性について考えます。本年度で6回目を迎え、ますます充実してきております。是非ご参加ください。

日 時：2011年8月5日（金）10：20～17：00（予定）
場 所：国立民族学博物館 セミナー室および展示場
（大阪府吹田市千里万博公園10-1）
プログラム：＜第1部＞講演とミュージアムツアー
＜第2部＞ワークショップ
参加費：無 料
問い合わせ先：中山京子（knakayam@main.teikyo-u.ac.jp）



寄 贈 図 書

- デビッド・C.ポロック，ルース＝ヴァン・リーケン著 嘉納もも，日部八重子 訳『サードカルチャーキッズ 多文化の間で生きる子どもたち』スリーエーネットワーク，2010年
- 中山あおい，森実，森田英嗣，園田雅春，鈴木真由子，石川聡子 著『シティズンシップへの教育』新曜社，2010年
- ルート・ヴォダック，ミヒャエル・マイヤー著 野呂香代子 監訳『批判的談話分析入門—クリティカル・ディスコース・アナリシスの方法』三元社，2010年

◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の関わられました文献・図書・報告書・教材など，また，会員の所属する学校での紀要等がございましたら，学会にご寄贈ください。

◆学会ホームページのご案内

研究大会やワークショップなどの情報をご覧ください。アドレスは次のとおりです。

<http://www.kokusairikai.com/>

事務局通信

新入会員

以下の4名の方が、2010年12月31日までに入会を承認されました。

氏名	所属
飯田 和郎	横浜創英短期大学
大川 光基	愛媛県立中山高等学校
長谷川 功	桐蔭学園中学校・高等学校
新村 恵美	目白大学

事務局からの連絡とお願い

◆事務局「校名変更」のお知らせ

事務局が置かれている「文化女子大学」は、2011年4月1日より「文化学園大学」に名称変更されます。事務所移転ではございませんので、住所、連絡先等には変更はありません。

◆年会費納入のお願い

当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いいただきますよう宜しくお願いいたします。

- 会費：正会員8,000円 学生会員4,000円 団体会員30,000円
- 郵便振り込み：口座番号：00120-5-601555 加入者名 日本国際理解教育学会

◆紀要『国際理解教育』の購入手続きについて

現在、第1号を除き、最新の16号までの在庫がございますが、在庫が僅少の号も出始めております。学会ホームページにバックナンバーの総目次が掲載されています。

ご希望の号数および冊数をファックス（042-327-8874）またはEメール（kokusairikai@bunka.ac.jp）で事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

◆住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞っている場合が少なからずあります。所属変更によるお引っ越しなどで住所・所属等に変更がありましたら、ファックス（042-327-8874）または、Eメール（kokusairikai@bunka.ac.jp）でお知らせください。また、会員種別の変更もお知らせください。

◆ニューズレター投稿のお願い

ニューズレターでは、ひろく会員の皆様の活動をご紹介するために「会員だより」の欄を設けています。「会員だより」では、以下の条件で、会員の投稿をお願いしています。

- 内容：現在の研究テーマや活動、国際理解教育に関する考えについて
- 分量：本文800字以内、写真（JPEG形式、デジカメ写真）1枚
投稿をご希望する場合は、お名前、所属を明記の上、事前に以下の連絡先までメールでお知らせください。あらためて執筆のご依頼をさせていただきます。投稿希望者が多数の場合には、調整させていただきます。
- 連絡先：桐谷 正信（埼玉大学） kiritani@mail.saitama-u.ac.jp